

を生じ青々として冬枯せず、よて川竹と呼なるべし、插花には頗る雅趣あれど、水上がたし、是は食鹽の苦水に、枝葉を強く浸して用ふべし、

〔延喜式五齋宮〕御贖料略○中 小川竹廿株

〔延喜式十七内匠〕御輿一具略○中 蓋下棧料、川竹十株、

〔萬葉集二挽歌〕吉備津采女死時柿本朝臣麿作歌一首并短歌

秋山下部留妹、奈用竹乃、騰遠依子等者略○下

〔萬葉集抄五〕なゆ竹とは唐竹を云にや、なよ竹といへり、ゆとよと同内相通也、なよ竹のよなきなどもよめり、唐竹にあたり、よながくして、とをくなみよれば、なゆ竹のとをよるよことよそへたり、

〔冠辭考七奈〕なゆたけのとをよるこらみことも

卷三に、長名湯竹乃、十縁皇子云々、こはたをやかなる女の姿を、なよ、かなる竹に譬へて冠らせたり、なゆ竹は女竹にて、是を皮竹ことになよ、かにたわめば、玄かいひ音通ゆなり、且とをよるも、たをやかてふに同じく、共に音かよへり、古事記に、大名持命打竹之、登々遠々登々遠々通疊字をかく書て、訓はとを、獻天之真魚昨也ともあり、

〔古今和歌集十名〕かはたけ。 かげのりのおほぎみ

さよふけてなかばたけゆく久かたの月吹きかへせ秋の山風

〔枕草子六〕あはれなる物

川竹の風にふかれたる夕ぐれ

〔後撰和歌集十雜〕女ともだちのつねにいひかはしけるを、久しくおとづれざりければ、十月ばかりに、あだ人のおもふといひし言のはといふ、ぶることをいひつかはしたりければ、竹のは